



困難を乗り越えた強さ

大越町立大越中学校教諭

渡邊 朱美

離婚・病気・子供のいじめと
さんざんな目にあっても、負け
ることなく前進する強さに感動
した。

子育てに教師にと、毎日を送
る私には、信じられないこと信
じたくないことが書かれて
いた。

教師として、学校に勤務し、
さまざまな経験を積んできた。
日々変化していく、子供たちの
気持ちを理解しようと努力して
も、理解できずに悩んだことも
あった。時には、家庭の問題に
踏み込めぬいら立ちの中で、時
を過ごしたこともある。

「親も教師も子供の行動の点
しか見ていない。そして、その
点から子供の心を大人の心で推
測する。子供の心は随時ゆれ動
く。親子関係・交友関係・興味
によりさまざまに変化する。ど
こに刺激が加わっても反応が出
やすい感受性をもっているのが
子供だ。行動を生み出すみなも
とである心を理解することは、
大人にとって苦手な作業のよ
うだ」

小学校五・六年と息子が不登
校となり、教師の対応や言動に

批判を持った著者であった。そ
んな中でも、自分を見つめる時
間を持ち、学習を始める。年月
は娘と息子の心も体も成長さ
せた。

「どんな子も幸せになる権利
をもっている。決してあきらめ
てほしくない。そして、それを
育むのが、私たち大人の役割で
はないだろうか？」と著者は
言う。

あいもかわらず「いじめ」は
続いていくが、夢を確実に現実
のものにしていく努力が続けら
れる。

繰り返される「いじめ」にも、
さまざまな出来事にも、三人で
乗り切ってきた親子の強さに感
動した。親として教師として字
ぶことの多い作品だった。
出来るならば、同じ悲しみを
抱く子供がいない世の中であ
ってほしい。

本 名称…母業失格
著者名…井上朝子
発行年…一九九九年
本コード…ISBN

四九一〇〇六六一

一冊の本

〈わたし〉は十七歳 それとも四十二歳

私は、北村薫さんの本が好き
だ。文庫化された作品は、全て
読んでいます。単行本は、寝ころん
で読むには少々重すぎるので、
文庫版が出るのをじっと待ち続
け、発売日をチェックし、手に
入れる。よって、ベストセラ―と
して騒がれていたこの作品「ス
キップ」も、待つこと四年、よ
うやく手にすることができた。

この作品には、十七歳の一ノ
瀬真理子がタイムスリップ、四
十二歳の自分、桜木真理子にな
ってしまふことによつて起こ
る、様々なことがらが綴られて
いる。昭和四十年代の人間が、
平成の時代に突如現われて感じ
る、時の流れ。この本を読んだ
ことで、現代の生活と、私の生
まれた頃の暮らしを比較してみ
ることもできた。

普通の人にとっては、暮らし
の変化はゆるやかに起こってい
るはずなのに、二十五年前と今
を昨日と今日にすれば、恐ろし
いほどの違いがある。良いか悪
いかは別としてではあるが。

また、読み始めてしばらくは、
女子高生・十七歳の〈わたし〉
のつもりだったが、ふと気づく
と、四十二歳の〈わたし〉とし

て読んでいた私がいいた。普段は、
生徒とそう違わないつもりでい
るのに、実年齢は偽れないもの
だと、妙に感心してしまった。

さらに、四十二歳の真理子さ
んの職業が教員というの、ま
た味わいがある。それを、十七
歳の心で切り抜けて行くところ
には、少々嫉妬したり、羨望の
思いに捕われたりした。そこに
無理がなく、さらっとしている
のも、北村薫さんならではのな
だろう。経歴によると、北村さ
んは、高校で国語を教えていら
したという。道理で、描写が細
やかな訳である。

この本を読んで、主人公のよ
うに、キリリと生きて行くこと
が出来ればいいなと思った。そ
して、私の娘にも、九年後に読
ませて、感想を聞きたいと思
うが、無理か。

本 名称…スキップ
著者名…北村 薫
発行所…新潮文庫
発行年…一九九九年七月一日
本コード…ISBN

四一〇一三七四三三三
10C 10C